

平成 17 年第 1 回 野生生物の生物学的知見研究会議 議事要旨

I 日時：平成 17 年 8 月 12 日（金）15：00～17：20

II 場所：経済産業省別館 8 階 817 号会議室

III 出席研究班員：花里孝幸、門上希和夫、須之部友基、田辺信介、中村正久、米田久美子

オブザーバー（検討会座長）：大島康行（敬称略）

事務局：上家環境安全課長他

IV 議題：

議題 1 平成 17 年度 ExTEND2005 野生生物の生物学的知見研究課題について

議題 2 その他

V 議事要旨

(1) ExTEND2005 全体、及び、野生生物に関する生物学的知見の基本的方向性について事務局から説明の後、検討が行われた。

【主な意見】

- ・5 年間で何をやれば目的を満たすのか、来年度以降の課題も同時に考える必要がある。
- ・生態系影響については環境省でしかできないことなので重点的に行うべきである。
- ・自然環境の影響要因は多くかつ複雑で、戦略的にやらないと要因を特定することは非常に難しい。
- ・特に普通種については評価に使用できるようなデータが無いことが多い。本調査がデータの収集に寄与できれば良い。長期的かつ定量的な調査が必要だ。調査したはいいが、使い道の無いデータが集まってくるだけという危険性があることも念頭に置いて欲しい。
- ・魚の大量死などがあるとすぐに化学物質汚染を危惧するが、実際には化学物質ではなく、生態系操作による結果であると考えられるケースが多い。化学物質の影響については生態系のシステムを解明した上で考えなければ、結論を見誤る。

- (2) 平成 17 年度研究課題として、「課題 1. 魚介類におけるダイオキシン類蓄積量の比較」「課題 2. POPs 及び候補物質による日韓沿岸及び近海の野生生物汚染の実態解明」「課題 3. 雌雄同体性魚類の性の可塑性と社会構造に関する研究」「課題 4. 魚や水草の放流や移入による湖沼生態系かく乱の実態とそのメカニズムの解明」が提案され、この内容について各研究代表者が発表を行い、審議が行われた。

【主な意見】

- ・魚類のようなエラをもつ動物では、生物濃縮はあまり影響しない。むしろ環境水からの影響が強く、更に言えば水は底質から影響を受けている。食物から暴露しても、水と平衡状態になるようにエラを通じて短期間で排出してしまう。特に脂肪重量あたりでは種間差は殆ど無いだろう。
- ・リスク評価は湿重量でやった方がよいが、生物濃縮の評価は脂肪重量がよい。
- ・本研究では野外での個体以上のレベルでの反応を中心に、野外で影響が起きているのかどうか、そこに結びつくように考えていくべきである。
- ・化学物質審査規制法では生態系影響も審査項目に含んでいるが、評価が困難であった情報を集める必要がある。性転換やカエルの奇形などについても情報を整理すべきである。他の研究で進んでいる部分とも連携していく。
- ・班員間での共同研究も推進する。
- ・少なくとも 5 年は継続し、各課題間を横断的に考察し、理解を深める。

- (3) 身近な野生生物の観察事業について環境省から説明があり、審議が行われた。

以 上